

閲覧用

河内長野市都市計画マスタープラン(案)に対するパブリックコメント意見及び市の考え方一覧

令和8年9月4日(金)～令和8年10月5日(月)まで、市ホームページ及び市内の主な公共施設において公表し、河内長野市都市計画マスタープラン(案)に対するパブリックコメントの意見募集を実施しましたところ、2名の方から8件の貴重なご意見をいただきました。

ご協力、ありがとうございました。これらのご意見と、ご意見に対する市の考え方は下記のとおりです。

番号	ご意見	市の考え
1	河内長野市都市計画マスタープランの「表紙」について 挿入するイメージ図に、「中世に出逢えるまち河内長野」(日本遺産)のこぼれ入れ、以下の文章の内容を連想させるイラストを配置する。 都心から 30 分の場所にありながら、自然や文化・歴史を感じられるまち、河内長野。自然と親しむアウトドア体験、ながく大切に守り継がれてきた神社仏閣。ここにしかない”<u>時間がゆっくりと流れていて、国内外から多くの人を惹きつける魅力になっています。慌ただしい日々の中で失った時間を取り戻し、豊かな時間を蓄えていく。そんな時間の楽しみ方が、ここにはあります</u> この文章は、第6次総合計画基本構想・卓上日めくりカレンダーの27日、「ここにしかない時間を求めて」から引用しました。 <補足説明> 河内長野市 都市計画マスタープラン(以下プラン)と第6次総合計画との関連 このプランは、「上位計画である河内長野市第6次総合計画等に即して、概ね20年後の将来を見据え、今後10年間のまちづくりに関する目標や方向性を示すものです。」(2ページ)となっています。そこで、<河内長野市「第6次総合計画基本構想・卓上日めくりカレンダー」>から抜粋してみました。カレンダーの表紙は “ふだんを生きる、じぶんが活きる。知るほど暮らすほど「好き」が深まる千年都市。河内長野”となっています。	都市計画マスタープランは、都市計画法第18条の2の規定に基づく「市町村の都市計画に関する基本的な方針」であり、概ね20年後の将来を見据え、今後10年間の都市計画に関する目標や方向性を示す計画です。 特に、本都市計画マスタープランにおいては、本市が今後進めていくまちづくりのビジョン「まちの価値を高め、次世代につながる都市づくり」を可視化することで、市民や事業者の皆様と今後目指すまちづくりの将来像や価値観を共有することのできる計画としています。 そのため、表紙については、まちづくりのビジョンの基となる河内長野市の地形を現わしたイラストを表紙に掲載することとしています。

そしてカレンダーの「1日」(前書き)のページは、タイトルが「千年都市とみんなの未来」で、本文が「河内長野がなぜ、古くから多くの人に愛されてきたのか。その理由を知ること、これからの未来を考えるヒントが見えてくるかも知れません。…」となっており、

河内長野が古くから愛されてきた理由、つまり「河内長野らしさ」あるいは河内長野の良さがカレンダーの以下のページに載っているの、抜粋してみました。

4日(理由1)地盤が固い(強い)

6日(理由2)自然(みどり)が身近にある

7日(理由3)きれいな水。美しい自然

9日(理由4)地域の自然や暮らしを守ってきた人々(まちのみんな)

10日・16日(理由5)人々の心地よいつながり

11日「中世に出逢えるまち」(日本遺産)

12日(理由6)千年続いてきた「ふだんの暮らし」

以上が「河内長野らしさ」といえるでしょう。

カレンダーの13日からは「10年後、私たちはどんな「ふだん」を生活しているのだろう。」ととなっていて、たとえば14日は「ほたるも、子どもたちも、光ってる。」とのタイトル。そしてカレンダーの27日には、「“ここにしかない”時間を求めて」とのタイトルで、以下の内容が書かれています。

都心から30分の場所にありながら、自然や文化・歴史を感じられるまち、河内長野。自然と親しむアウトドア体験、ながく大切に守り継がれてきた神社仏閣。ここにしかない”時間がゆっくりと流れていて、国内外から多くの人を惹きつける魅力になっています。慌ただしい日々の中で失った時間を取り戻し、豊かな時間を蓄えていく。そんな時間の楽しみ方が、ここにはあります

この「ここにしかないゆっくりと流れる時間」を市民にはふだんの暮らしの中

	で、観光などで河内長野を訪れる人々にも、やすらぎを感じてもらえることが、ほか市にはない河内長野の良さであり「河内長野らしさ」でもあります。これを河内長野の【ブランド】としての価値を与え、かつ市民全員の【シビックプライド】となり得るものだと考えます。また河内長野の強みを生かしたサクセスフルでサステナブルなプランの「基盤」におくべきではないかと考えます。 そしてこれを象徴的に「中世に出逢えるまち」(日本遺産)と一言で言えると考えます。この豊かな時間は、中世から千年にわたって今の河内長野地域に暮らす人々が農業、林業、交易を営みながら、ふだんの暮らしの中で培ってきました。またこれが、人々のつながり、地域への愛着となってきたものと推測します。そしてこれを、現在および未来により強固にしていくことが、河内長野の“静かな”繁栄となると考えます。「中世に出逢えるまち」の「中世」は過去の時代ですが、中世から千年にわたって引き継がれてきた文化(豊かな時間)は、河内長野市民にとって現在のものであり、未来に引き継いでいくものです。 さらに付け加えると、中世からのこの文化は、経済的にはこの地域の人々が農業や林業、交易を通じて担ってきました。つまり里山文化ともいえるもので、太陽や水の恵みを受ける自然の中で、土に触れて米や野菜、綿花などを育てて食料や衣料とし、草を刈り樹木を育てて住居としてきたわけです。人間も自然の一部として、草や木、昆虫を含む動物、菌類や土中の細菌含めた生態系の中で、それらと共存して生きてきました。しかし自然は人間の思い通りにはなりません。日照りもあれば洪水もあり、不作の年が何度もあったに違いありません。自然の前では謙虚にならざるを得ません。また急いでも収穫しようとしても意味がありません。そのような中ではゆったりした時間を過ごすことが必然になります。また、個人の努力だけでは生きていけず、共同作業を行う中で人々のつながり、格差のない関係もできています。 「中世に出逢える」とは、歴史的な文化と里山文化に触れ、人々はここにしかない豊かな時間を実感することというわけです。	
2	4 まちづくりのビジョン【まちの価値を高め、次世代につなぐ都市づくり】について (6～9ページ) (1)「都市づくり」という言葉 ⇒ 「まちづくり」に <理由> 都市ということばは都会のイメージを連想してしまいます。河内長野は都会と田舎が共存しているまちなので、「まちづくり」についてもひらがな	「都市づくり」という言葉における「都市」については、「都会的な」ものを意味するものではなく、都市計画や都市基盤、都市構造などといった「まちの基盤」を意味するものとして使用しています。 本計画におけるまちづくりにより、まちの価値を高め、次世

	が好ましいです。	代に繋ぐ「まちの基盤」を創造していくことをイメージし、「都市づくり」という文言を使用しています。
3	4 まちづくりのビジョン【まちの価値を高め、次世代につなぐ都市づくり】について (6～9ページ) (2)4-1「河内長野らしさ」を次世代につなぐ恒久的施策の推進」の説明の3つ目のフレーズ「開発団地では…」の部分は、次のページの2「多様な拠点の形成・機能強化による暮らしの充実」に移し、タイトルも2「開発団地および多様な拠点の形成・機能強化による暮らしの充実」に変更する。 <理由>「河内長野らしさ」をどのように考えるかの問題ですが、開発団地は、歴史・文化資源や豊かな自然資本などと括るよりも、土地利用では市街化区域になることもあり、駅前などの商業地域、行政拠点、(道の駅)などの括りに入れた方がより親和性が高いと思われます。 ただし、河内長野駅前などは高野街道沿いでもあり、完全に分けてしまうのは無理であり、むしろ、河内長野駅前以外の他の拠点についても「中世に出逢えるまち」をまちづくりの基盤として「形成・機能強化」を図るのが望ましいと考えます。	本市の開発団地については、本市にとって貴重なストック(財産)であり、「河内長野らしさ」を構成する要素の一つであると考えています。 6頁の【1「河内長野らしさ」を次世代につなぐ恒久的施策の推進】については、これまで本市が恒久的に進めてきた基盤となる施策について、今後も継続・発展させていくことを説明しています。開発団地という本市の貴重なストックについても、今後多様な世代が住み続けたくなる住宅地への再生・再編を図っていくことをあわせて説明しています。 7頁の【2 多様な拠点の形成・機能強化による暮らしの充実】については、市街化区域内での取り組みを説明するものではなく、市民の皆様が集い、働き、楽しみ、文化やスポーツに親しみ、安心して憩うことができるような多様な拠点を形成していくことを説明するものです。
4	(3)4 まちづくりのビジョン【まちの価値を高め、次世代につなぐ都市づくり】の4つの項目の関係について 4-1「河内長野らしさ」を次世代につなぐ恒久的施策の推進」、4-2「多様な拠点の形成・機能強化による暮らしの充実」、4-3「拠点と地域のネットワーク化による生活圏の拡大と地域ポテンシャルの向上」および4-4「シビックプライドの醸成による世代循環の創出 年齢構成のバランスが取れた持続可能な都市構造へ」について、提案【1】の考え方を反映させて全体を「中世に出逢えるまち」(ここにしかないゆっくりと流れる豊かな時間)を基盤として有機的に関連させて構成すること。 ただし、私たちは今から中世に戻ることはできませんし、現代文明にも長所はたくさんあります。科学技術の進歩と資本主義により、私たちは経済的にも多くの恩恵を受けていて、プランの内容もこのこともまちの価値を高めるた	6頁の【1「河内長野らしさ」を次世代につなぐ恒久的施策の推進】では、日本遺産「中世に出逢えるまち～千年にわたり護られてきた中世文化遺産の宝庫～」の構成文化財である観心寺・金剛寺や高野街道などの歴史・文化資源を都市の基盤として、今後も守り、磨き、活かし続けることとしています。 4つの項目については、ご意見のとおり、【1】都市の基盤を継続・発展させながら、【2】多様な拠点の形成及び機能強化を進め、【3】各拠点と地域をネットワークで結び生活圏の拡大と

	めに必要不可欠です。 一方弊害もあります。例えば個人の能力やその置かれた環境によって経済格差が生まれ、それを解消するため競争が起こり、多くの人々が心を疲弊させていることも事実です。 そこで河内長野では豊かな自然や多くの歴史・文化のある環境作りを優先させることにより、疲弊した心を癒し、精神的豊かさを感じられるまちを目指すことが望ましいと考えます。すでに、すぐ近くで自然の中でのウォーキングや農業体験ができるという理由で、河内長野に移住する人々も徐々に増えています。 以上のことから、4-1を中心(基盤)に置き、4-2、4-3をその基盤の上に位置付けるのが望ましいと考えます。4-4については、河内長野の魅力を市の内外に広めることです。	地域のポテンシャルを向上させ、【4】シビックプライドを育み、魅力を市内外に広げることで、新たな世代の転入につなげ世代の循環を生み出し、「年齢構成のバランスが取れた持続可能な都市を実現」することを表しています。
5	4-1「河内長野らしさ」を次世代につなぐ 恒久的施策の推進(6ページ)の説明を以下のように、追加変更すること(赤字部分) 「都心から 30 分の場所にありながら、観心寺金剛寺や高野街道などの歴史・文化資源、森林・農地や清流などの豊かな自然資本をもつ河内長野。ここにしかない” 時間がゆっくりと流れ、国内外から多くの人を惹きつける魅力になっています。慌ただしい日々の中で失った時間を取り戻し、豊かな時間を蓄えていく。そんな時間の楽しみ方が、ここにはあります。そして、地盤の固さは府内トップクラスで、里山文化によって培われた人々の強いつながりもあります。 本市の強みである、これらの「河内長野らしさ」は、「中世に出逢えるまち」(日本遺産)としてブランド化し、次世代へ引き継ぐべきまちの基盤として、今後も農地や林地の生産力を高めながら、これらの基盤を守り、磨き、活かし続けます。 また、このブランドはまちづくりの他のビジョンにもできる限り反映させます。」(以上) 「開発団地では…」は 4-2 へ移行 4-2「多様な拠点の形成・機能強化による暮らしの充実」(7 ページ)を「開発団地	日本遺産「中世に出逢えるまち～千年にわたり護られてきた中世文化遺産の宝庫～」の構成文化財である観心寺・金剛寺や高野街道をはじめとする歴史・文化資源については、本市が今後も守り、磨き、活かし続けるべき資源、ブランドであると認識しています。 一方、本計画は都市計画法第18条の2の規定に基づく「市町村の都市計画に関する基本的な方針」であり、本市の都市計画や土地利用の方向性を示す計画ですので、ご提案を頂きました内容については、今後の本市施策の参考とさせて頂き、本計画における記載内容についての変更は行いません。

	および(追加)多様な拠点の形成・機能強化による暮らしの充実」とし、説明を以下のようにする。 「開発団地では、地域ごとの実情に応じた用途変更や地区計画の見直し、まちの魅力を高める機能を持つ拠点の整備を進め、多様な世代が住み続けたいとなる住宅地へと再生・再編を図ります。(以上 4-1 から) 中心市街地である河内長野駅前活性化・・・(原文通り) 市民が暮らし、集い、働き、楽しみ・・・(以下原文通り) また、機能強化には「中世に出逢えるまち」が感じられるように工夫し、ブランド価値を高め、市民のシビックプライドを醸成します。」(以上) 4-4「高めたブランド価値によるシビックプライドの醸成と世代循環の創出 年齢構成のバランスが取れた持続可能な都市構造へ」(9 ページ)の説明を以下のように変更する。 「河内長野市のブランド「中世に出逢えるまち」(日本遺産)によって人の心に醸成される豊かな時間は、この地域に暮らす人々が中世から千年にわたって、ふだんの暮らしの中で培ってきました。加えてまちの拠点とその機能強化、それらを結ぶ移動手段による豊かな暮らしの実感が、河内長野市への愛着と誇り、すなわちシビックプライドを育み、その魅力が市民から市外へ広がることで、河内長野市の「選ばれるまち」としての都市イメージはさらに向上していきます。そして、高まったまちの魅力を原動力に、子育て世代をはじめとする新たな世代の転入につなげ、世代の循環を生み出すことで、年齢構成のバランスが取れた持続可能な都市を実現することこそが、本市の目指す未来です。	
6	5 将来のまちのかたち(10～11 ページ)について 以下のように修正することを提案します。(赤字部分) まちづくりのビジョンであるまちの価値を高め、次世代につなぐまちづくりを具体化した将来のまちのかたちについては、「中世に出逢えるまち」(ゆっくり	日本遺産「中世に出逢えるまち～千年にわたり護られてきた中世文化遺産の宝庫～」の構成文化財である観心寺・金剛寺や高野街道をはじめとする歴史・文化資源については、本市が今後も守り、磨き、活かし続けるべき資源、ブランドであると認識

と流れる豊かな時間)をできる限り具体化したものにアップデートします。

<理由>10 年後の河内長野市の形を、以前のプランでは「ネットワーク型コンパクトシティ」としていますが、これは市全体としての形にはなりません。つまり「河内長野らしさ」の部分は「ネットワーク型コンパクトシティ」に含まれていません。また、この言葉自体が横文字で一般的ではなく、多くの市民に馴染みにくいのは明らかです。それよりも「中世に出逢えるまち」は日本資産のストーリーでもあり馴染み易いと考えます。ただし、「中世に出逢えるまち」は、歴史・文化資産や自然資源だけでなく、開発団地や多くの「拠点」についても、特に河内長野や三日市などの駅前、くろまろの郷などのデザインや景観には「中世に出逢えるまち」(ゆっくり流れる豊かな時間)をできる限り適用したものにすることを前提としています。

1「河内長野らしさ」(ブランド)を次世代につなぐ恒久的施策の推進

●古くからの歴史や豊かな自然に恵まれた 5 つの谷と河川及び高野街道沿いにおける歴史的なまちなみ、観光・レクリエーションの場など、農業・林業の振興を含む地域の多様な個性を適切に活用することで、「中世に出逢えるまち」としての魅力を高めるとともに、将来に繋ぐまちづくりを進めます。

●開発団地における空き家・空き地、遊休地等の活用や住工共生地における環境保全等にあたっては、社会や地域の新たなニーズに合わせた機能導入や環境保全を図るため用途地域の変更や地区計画の策定等の都市計画手法の活用を積極的に検討します。

⇒2多様な拠点の形成・機能強化による暮らしの充実へ移行(理由は提案【2】の(2)と同じ)

●美加の台地域全域およびその周辺を「一体型共創ゾーン」と位置づけ、住民・企業・団体・行政等の共創による持続可能な地域交流・まちづくりの創造を図っていきます。

小中学校の統合跡地については、地域の実情にあわせた新たな機能誘導を図るなど官民連携のまちづくりを進めます。

周辺地域については、延命寺、地域内の興禅寺や赤坂上之山神社などの神社仏閣、神ガ丘集落や里山わびすけの里山文化も含めて、千年続いた過去から

しています。

一方、本計画は都市計画法第18条の2の規定に基づく「市町村の都市計画に関する基本的な方針」であり、本市の都市計画や土地利用の方向性を示す計画ですので、ご提案を頂きました内容については、今後の本市施策の参考とさせて頂き、本計画における記載内容についての変更は行いません。

将来へ継続することも含めたまちづくりを図る。(住民の合意が必要ですが)

2 開発団地および多様な拠点の形成・機能強化による暮らしの充実

●開発団地における空き家・空き地、遊休地等の活用や住工共生地における環境保全等にあたっては、社会や地域の新たなニーズに合わせた機能導入や環境保全を図るため用途地域の変更や地区計画の策定等の都市計画手法の活用を積極的に検討します。

(1「河内長野らしさ」(ブランド)を次世代につなぐ恒久的施策の推進から移行)

●新たに整備される幹線道路沿道等を「活力創造ゾーン」と位置づけ、幹線道路整備と合わせた市街地整備を図ることで、既存企業の業績拡大、企業誘致による…(中略)…を行います。

<補足>

今回、河内長野市のブランドを「中世に出逢えるまち」(日本遺産)とし、その意味を以下のようにすることを、すでに述べしました。

都心から 30 分の場所にありながら、自然や文化・歴史を感じられるまち、河内長野。自然と親しむアウトドア体験、ながく大切に守り継がれてきた神社仏閣。こにしかない” 時間がゆっくりと流れていて、国内外から多くの人を惹きつける魅力になっています。慌ただしい日々の中で失った時間を取り戻し、豊かな時間を蓄えていく。そんな時間の楽しみ方が、ここにはあります

このプランでも 6 ページに「河内長野らしさ」を次世代につなぐ恒久的施策の推進として、古くからの歴史や自然に恵まれた5つの谷と河川及び高野街道沿いにおける歴史的なまちなみ、観光・レクリエーションの場など、「地域の多様な個性を適切に活用することで」その魅力を高めるとともに、将来に繋ぐまちづくりを進めます、と書かれています。

しかし、「地域の多様な個性を適切に活用すること」とは何かが不明確です。河内長野市では農業は担い手が高齢化するなど危機的状況で、現在すでに多くの耕作放棄地があり、この先ますます衰退するのは明白です。このような状況は棚田などの景観としても好ましくありません。林業もよく似た状況です。このことを民間の自己責任として放置することは、結果として河内長野の価値を下げることになってしまいます。

具体的には、これまでにない施策が必要です。そこで次の提案です。

6 まちづくりの方針と実現方策について

これまでの提案内容と関連する部分について、この章の項目としてはすべて書かれています。例えば、13 ページの「自然的土地利用」の項目

■農業地域

食料などの安定供給、生物多様性の確保、良好な景観の形成、市民のレクリエーション利用の場など多面的な機能を有する貴重な農地を守ることを基本とします。

■森林地域

河内長野の魅力を支える森林は、林業の生産の場であると同時に、良好な景観の形成、レクリエーションや観光の場、保水など多面的機能を有することから、積極的な保全・活用に努めます。

また、同じページの「都市的土地利用」の項目では

■集落地など

5つの河川系に点在する集落地は、独自の魅力をもつ自然や歴史などの特性を生かしたまちづくりを行います。将来にわたって持続可能な集落となるよう、集落の活力維持・向上を図り、地域の生活環境を向上します。また、日本遺産の構成文化財でもある棚田の景観やふるさと景観を有する里山は、多面的な機能とあわせて保全に努めます。

と書かれています。これ以外(34 ページ)でも

■生産緑地地区の保全と活用

良好な景観の形成や安全で快適な空間の確保、防災・環境面での機能向上など、都市農地が有する多様な役割を将来にわたり発揮できるよう、生産緑地地区の新規指定や貸借の促進、特定生産緑地の指定を進め、適切な保全と有効活用を図ります。

と書かれています。

しかし、その具体策は見えていません。農地や森林の保全には、もう一歩進めて経済活動に関する施策が必要です。つまり農産物・林産物の「地産地消」を推進する施策をまちづくりの方針の中に入れるべきです。そうすることによって地域内で循環する経済ができ、農業事業者や林業関係の事業者が経済的に潤い、農地や森林の保全に必要な資金ができ、農業従事者や林業従事者の雇用も確保できます。その結果、農地・森林および里山の保全が結果的に可能になります。

都市計画マスタープランについては、本市の都市計画や土地利用の方向性を示す計画です。

ご意見を頂きました具体策のご提案については、今後の本市施策の参考とさせていただきます。

地産地消の具体策の一つが学校給食の食材に地元の農産物を使うことです。この施策は全国でも多くの市町村(千葉県いすみ市など)がオーガニック給食の取り組みとして推進しています(農水省ホームページ)。河内長野でも市民活動団体である「河内長野オーガニック給食チーム」と「かわちなが nora」が映画上映会などの啓発活動や実際に農業を始める一方、一般市民に対して家庭菜園教室などのイベントを開催したり、マルシェに出店して農産物を販売すると同時に啓発活動を行っています。また市長面談を始め、市の担当部課とも連絡を取りながら、まだ細々ですが前に進めています。これを都市計画としても位置付けてほしいわけです。第 6 次総合計画の基本構想の卓上日めくりカレンダーの 28 日にも「地産地消で日本一の給食カレーを。」となっています。

また食材を有機農産物に変えれば、子どもたちはより健康になります。(農業に化学肥料や農薬が使われるようになって、昔にはなかった子どもたちのアレルギー症状など色々な症状が増えています。また精神的に不安定になることから「いじめ」も増えているようです)

さらに地産地消は学校給食だけでなく、こども園やそのほかの施設、一般家庭やレストランにも広げ、木材の地産地消についても、河内材の市内での活用促進を進めることは、農地や森林などの保全にさらに大きな力となります。

このプランへの提案として、6 まちづくりの方針と実現施策に「循環経済ネットワークの創生」をぜひ加えていただきたいです。

実際に、この施策をどのような形で加えるかは、趣旨が基本的に承認されれば、そのうえで再度都市計画審議会に諮っていただきたいです。

よろしくお願いします。

<補足>

このためには、現在の市のいくつかの決め事(システム)を見直し、更新することが必要になり、市には負担をかけることになります。しかし、循環経済ネットワークができること自体が河内長野の強みとなります。

またオーガニック農業を推進するために、市として「オーガニックビレッジ宣言」を行うことで、対外的にもさらにアピールできます。そして「中世に出逢えるまち」のブランドをより強固なものとするができます。

なお、中世では有機農法しかありませんでした。

8	「河内長野らしさ」に掲げている「歴史・文化資源」「自然資本」「防災力」、これらすべてを活かし、さらに魅力を高める具体的方策として、有機土木を導入してください。 市は「中世に出逢えるまち」を謳っていますが、その中世のまちを支えていたのは古来の土木技術です。土の中の生命活動、水や空気の循環を妨げないよう要所ごとに必要な手を入れながら、自然の草木・水流を活かして人工物を配置する技術。そうした技術のおかげで地上の環境も安定し、古道や寺社の佇まいも、人々の暮らしも守られていたのではないのでしょうか。 洪水や土砂災害が頻発する今、こうした技術が見直されています。健全な土の中では、菌類をはじめ多様な生物が豊かな生態系をつくり、その中を水と空気が循環します。しかし近代土木では重機で土を押し固め、その上に重量物を置くことで、生物は排除され水と空気の流れも断たれてきました。行き場を失った水は、雨が降れば一気に表面を流れ、表土も草木も清流も、人里までも押し流してしまいます。 有機土木では、その土地の自然物(草、木、竹、落葉、燠炭、藁、石など)を使って、土の中の環境が改善するよう手助けをします。本来の土中環境を取り戻すことで、土地の保水力が蘇り、地盤も河川も安定します。重機や高価な資材は不要で、必要な材料は市内で調達できます。施工できる場所は無数にあります。公共施設から民家まで、山から里、川まであらゆる土木工事に生かせる技術だと思います。 ただ問題は技術者です。現在活躍している高田宏臣氏は千葉在住です。市の職員が高田氏に弟子入りするのが一番ですが、それだけでなくとも技術系職員が不足するなかそれはムリとしても、何らかの形で技術を学ぶ方法を考えていただきたい。入門として、市長にも職員の方々にも、是非、高田宏臣氏の著書「未来が変わる！土中環境と有機土木」「よくわかる土中環境」「これからの雑木の庭」などをお読みいただきたいです。施工例も多く記載されています。またyoutube に現場の動画も多数アップされています。また、市民に対しては、公園・遊歩道などを、レクチャーを受けながら市民自身が整備することや、一般住宅でできる土中環境改善の工夫などを広めていくことも、今まで意識していなかった土中環境に注目し、技術を知ってもらう良い機会となります。 この地域の自然環境(地上だけでなく、地中も含めて)全体を健全な状態に近づける、古来からの技術を使った有機土木こそが、「歴史・文化資源」を守り、「自然資本(森林・農地)」を活かし、「防災力」を高める“未来の技術”となるはずで	有機土木の導入について、行政における土木事業の公共工事に直ちに適用することは、現行の法規制や技術基準、安全性(耐荷力・耐震性など)の観点から困難ですが、今後、国の方針等を注視してまいります。
---	--	--

す。10年先、20年先を見据えて地道に実績を重ねていけば、いずれは河内長野市が、多くの施工例から技術が学べて資材調達もでき、新たな有機土木の人材が育つ先進地、発信地となっていくことでしょう。 市が有機土木導入のために経費や時間を費やしても、それは地元の資材と地元の人間でメンテナンスのできる土地や施設が増えることで、外部に資金が流出することなく市内で経済が回る、という形でメリットが上回ると思います。ぜひご検討ください。	
--	--

問合せ先 〒586－8501 河内長野市原町一丁目1番1号
河内長野市役所(河内長野市 成長戦略局 まち創造戦略部 秘書企画課)
電話:0721－53－1111